

都市近郊農山村地域における地域ビジョン策定手法に関する研究

—地域診断ワークショップ (RDWS) の考案—

鶴飼修 (滋賀県立大学 地域共生センター 准教授), 小島なぎさ ((一社) まちづくり石寺)

1. 背景・論点

地球環境と共生する人間社会を如何に構築するか。人間は地球に生を受けた生物であるにもかかわらず、その地球をむさぼり、自らの生存を脅かしている。人口の増大、経済の発展、いずれも人間自らが否定することは難しい。生活の利便性を享受したならばその生活を維持し、さらにより快適な生活を求めることが人間の性(さが)である。

日本は20世紀の急速な人口増加がピークを越え、21世紀は人口減少社会に突入した。併せて、人口ピラミッドの形は三角錐を構成し、超高齢化社会へ突入している。人口減少時代における人口の都市集中は、地方の衰退を促進し、各地域での自然との共生により育まれた国土の保全に危機的な状況をもたらしている。超高齢化社会の状況で如何にして地球環境と共生する活動を維持できるかも問われる。

一方で、世界的にみれば、日本は先進国として生活の利便性は高く、独自の文化、歴史も有している。その国土はプレート境界の島嶼で構成され、地形・地質的特性や気候が独特の生態系を育てている。そうした恵まれた国土、時代に棲まう人間は如何にして地球環境と共生すべきであろうか。

本稿では人々の行動の方向性を示す指針(以下ビジョン)について論じる。その指針は国や県レベルではなく、基礎自治体や学区・集落・自治会など人々が自ら生活圏として境界が認識できる範囲(この範囲を本稿では「地域」とする)を対象としたものである。地球環境との共生を念頭に、人間のふるまいのあり方について、地域レベルでビジョンを定める手法を考案する。

2. 地域診断法の効果

本稿では地域診断法を基礎として手法の考案を試みる。ここでいう地域診断法は、公衆衛生分野におけるものではなく、エコロジカルプランニングを基

礎理論とした地域レベルでのビジョンを見出す手法である。エコロジカルプランニングは1960年代にI.マクハークが提唱した生態系に配慮した開発手法であり、すなわち人間の開発行為において地球環境と人間社会の共生を考慮した方策を得る手法である。その手順は、プロジェクト対象地を様々な環境要素(レイヤ)で評価し、それらを重ね合わせた総合評価で開発の適地や方策を定めるものであった。1969年にDesign with Nature¹⁾として出版されている。

この手法は日本においても一時的に取り上げられたが、実践的に展開されたのは1990年代、茨城県住宅供給公社と大成建設株式会社が共同して百合が丘ニュータウン六反田池周辺地区であった²⁾。大成建設の手法は、開発プロジェクトに対してエコロジカルプランニングによる分析を独自のマトリックス解析し評価を行うものであった。この手法は2002年に書籍「テーマコミュニティの森」³⁾で公開されている。本稿における地域診断法は、この大成建設のエコロジカルプランニングによる手法を応用したものである。

地域診断法では3行4列を基本としたマトリックスの分析を行う。3行は対象地をとらえる3段階のスケール(例えば県レベル、市レベル、集落レベル)、4列は地学的、気象的、生態的、人為的の4つの側面からの特性の抽出である。マトリックス状に整理するデータは、いずれも地域の特性を示す客観的な情報とする。例えば地質図、気候区分、植生図、郷土史の情報である。分析ではマトリックスをタテ軸の属性毎の地域の位置づけと特性、横軸のスケール毎での地域の位置づけと特性を読み取り、最後には全体的に対象地の特性を考察する。すなわち客観的データの特性のつながりを読み解き、「この地域ならではの特性は何か」を総合的な言葉(フレーズ)で表現する。このフレーズを地域のビジョンとする。4つの側面の読み解きの基本的な考え方は、地学的

特性があり、気象的特性がありその影響で生態的特性があり、その上に人間の生活が営まれてきたというつながりである。人間の暮らしはその土地の環境に影響されているという、環境との調和による共生を基本とする。すなわち4つの側面のつながりを象徴する言葉を見出すことが出来れば、得られたビジョンには大地、すなわち地球との関係性が埋め込まれる。このように地域診断法の効果は、地域の特性を多様な側面に分解し再構築することで、当該地域における地球環境と人間生活のつながりを再認識し、その本質的な価値を明らかにするところにある。

3. 研究目的と方法

本稿ではこの地域診断法をもとに、住民等が簡易に取り組むことができる「地域診断ワークショップ (Regional Diagnosis Workshop 以下RDWS)」を考案し、その効果を確認する。

RDWSの考案では、①主たる実施者を地域住民とし、②簡易に短期間=1日でフレーズを導くこととし、かつ③地域診断法の要点を踏襲することを条件とする。その効果は、フレーズが地勢(特に大地の特性)を反映していること、すなわち、地域の地学的特性を捉えるキーワードが表出し、それを活かしたフレーズが創造されていることを指標とし、ケーススタディで確認する。

4. RDWSの考案

(1) 地域診断法の要点の応用

地域診断法の要点は以下の2点に整理される。

- ①客観的データの収集と特性(キーワード)の抽出
- ②キーワードのつながりを考察したフレーズ創造

この要点に対応したRDWSを考案する。

①客観的データの収集と特性(キーワード)の抽出

地域診断法における地域の客観的データをワークショップにおいて収集する方法は、地域外の者(以下、よそ者)を交えた2段階によるキーワードの抽出とする。地域資源を発見するワークショップは地域住民で行うことが多いが、地域住民の知識、認識による影響が大きい。よそ者を交えることで地域外からの評価や住民の気づきを得ることができ地域の評価に対する客観性が高まる。

第1段階でのキーワード抽出は地域住民に対するヒアリングとする。集まった地域住民が地域に対して有している知識を棚卸ししよそ者が書き留める形とする。これは地勢に関するものや歴史、文化、生活など様々な側面の内容が表出することが想定され

る。ここで抽出されるキーワードは、地域にあるもの、あったもの、地域資源を活かした昔の暮らしなどが想定される。

第2段階のキーワード抽出はよそ者が地域住民に地域のことを「現場」で紹介してもらう形で行う。これは「まちあるき」の形で実施し、住民とよそ者が一緒に地域を歩き、感じ、情報を得る。よそ者との共同作業により、住民の固定観念が薄まり、純粋な地域資源の再認識、発見がなされる。

この2段階のキーワード抽出で、おおよそその地域の特性が洗い出される。これらが地域診断法におけるマトリックスの各要素に相当する。

②キーワードのつながりを考察したフレーズの創造

抽出されたキーワードは、地域診断法による3行4列のマトリックスには対応していないため、基本的にはKJ法⁴⁾や質的統合法⁵⁾の情報整理方法に倣う。キーワードのつながりを考え重み付けを行いフレーズの核となるキーワードを絞り込む。重み付けされたキーワード群は軸や塊を形成するが、この塊をフレーズが説明できるように整理する。整理の形としては、質的統合法のように方向性が不確定なもの、階層を持つデータを表現するツリー構造のように根、節、枝、葉で構成するもの、課題(ここでいうフレーズ)からその要因を考える特性要因図⁶⁾のフィッシュボーン⁶⁾の形、が考えられるが、キーワードを集合しフレーズを導き出すためにフィッシュボーン⁶⁾の整理の形を採用する。

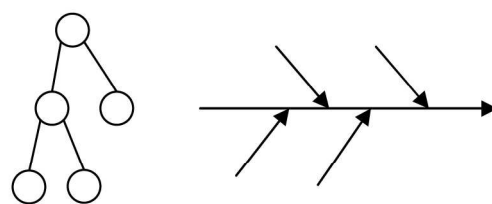


図1：ツリー構造(左)とフィッシュボーン(右)

(2) ワークショップの方法

地域診断法の要点を応用したワークショップを簡易に1日で開催するには、参加者の主体性を確保しつつ、参加者が可能な作業内容と必要な時間を確保することが必須である。そのため、参加者の主体性を確保する方法として、付箋と模造紙を用いた情報収集整理を行う。グループの構成人数は、主体性の確保と付箋の数と模造紙の大きさを加味し7名程度を限度とする。よそ者がグループに2名ずつ配置されるので地域住民は5名程度となる。そして、スムーズな進行を行うために、進行役としてファシリテ

ーターをグループに1名配置する。ファシリテーターはワークショップの主旨と手法を理解している者とする。

以上、地域診断法の要点の応用と、地域住民による実施、1日での実施を加味して、ワークショップの手順(ステップ)として整理すると図2のようになる。このステップをまとめたハンドブック(図3)を用いてケーススタディを行う。

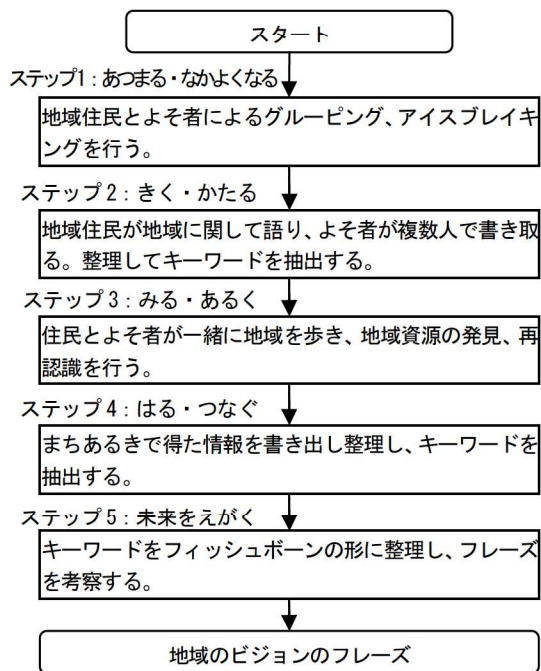


図2：地域診断ワークショップ(RDWS)の手順



図3：地域診断ワークショップ(RDWS)のハンドブック

5. ケーススタディ

滋賀県米原市の農山村集落であるK区を対象にRDWSを実施した。ワークショップは3グループに分かれて行った。ワークショップの概要と当該地区の地勢、各ステップで抽出されたキーワードとフレーズ、フィッシュボーンを図4に示す。

ワークショップの結果得られたフレーズは「未来に継承したいK区の人をつなげるアルペンロード」「未来に継承したいK区の川のそばの魅力ある暮らし」「未来に継承したいK区の自然が育んだひとの結(ゆい)」の3つであった。一方、K区の地勢は、北向きの谷筋に位置し、平地は少なく川沿いに

細長く集落が形成され、日本海側の気候で冬の寒さは厳しく、また、山に挟まれているので日照時間が短い。フレーズと地勢とを比較すると、1班は「アルペンロード」という言葉で川に沿った一本道の価値を表現し、2班は「川のそばの暮らし」として暮らしに身近な川の存在の価値を表している。一方、3班は「自然が育んだ人の結」と自然と人とのつながりの大切さを表現した。これらのフレーズ自体は同一のものではないが、フィッシュボーンの構成要素に着目すれば、いずれの班も「山」と「川(清流)」がステップ2、4およびフィッシュボーンに表出していることが確認できる。

6. 考察

3班で得られたフレーズは必ずしも同一の内容とは言えなかったが、フィッシュボーンの構成をみれば、地域の特性である「山」「川」を各班共通に認識し、その形態(1本道)や暮らしとの関わりに着目してフレーズを導き出したことが推察される。したがって、本ケーススタディでは、フレーズとフィッシュボーンを総合して対象地域の地勢と整合した内容が得られたものとする。

RDWSで行っている作業は、地域の「情報を収集」し、キーワードを「抽出」という単純な作業である。これを違うアプローチで2回繰り返すことで精査している。作業経過からは、収集された情報が的確であれば、どの班でも同じキーワードが抽出されることが読み取れた。これは地域診断法のマトリックスの情報収集で情報を絞り込みキーワードを抽出することと同じ作業である。また、フレーズの創出はグループのメンバーの力量に寄るところがあるが、共通のキーワードを元としているので極端に異なるフレーズは出てこないと推測される。

7. 結論

本稿では、地域診断法をもとに、住民等が簡易に取り組むことができるRDWSを考案し、その効果を確認した。ケーススタディからはRDWSの結果と地勢との整合性を確認することができた。そして、その整合が得られる要因はキーワードの抽出による地域特性の表出作業にあることが推測された。

8. おわりに

RDWSの手法は地域のビジョンを1日で、しかも、WS参加者を対象に導き出すというかなり強引な手法であることは否めない。しかしながら、農山村に

において地域の本質的な特性はそう多くあるものではなく、未来に何を継承するためにまちづくり活動を行うかを明確にするには意義があるものとする。今後は、多様なケースにおいて RDWS の成果を検証していくことで、このことはより明らかにされるであろう。

8. 参考文献

- 日本語版は1994年9月に下河辺らにより翻訳・出版された。
イアン・L・マクハーグ著 下河辺淳総括監訳 川瀬 篤美総括監訳

- (1994)デザイン・ウィズ・ネチャー,集文社
 - 茨城県水戸市百合が丘町,設計:茨城県住宅供給公社 大成建設株式会社(1993)13.7ha150戸の住宅地開発。
 - タイセイ総合研究所,細内信孝:テーマコミュニティの森〜ヒューマンサイズの新しい都市,ぎょうせい(2002) 鵜飼は執筆を分担。
 - 川喜田二郎(2003)発想法(第78版),中央公論新社
 - 山浦晴男(2016)質的統合入門(第2版),医学書院
 - 石川馨(2012)品質管理入門(第3版),日科技連
- 注:本研究は滋賀県立大学公募型地域課題研究(平成25年度、26年度)「持続可能な地域まちづくりビジョン創造手法の開発」、および滋賀県立大学公募型地域課題研究(平成27年度、28年度)「地域診断法」の実践が地域の将来に対する思考と行動に与える影響」の成果をとりまとめたものである。

1. 対象地域: 滋賀県米原市K区
 2. 実施日時: 2017年3月26日(日) 13:00~18:00
 3. 実施場所: 地区公民館
 4. グループ数: 3(住民10名、よそ者7名、ファシリテーター3名、司会1名、計21名)

地勢: 北向きの谷筋に居住区を有する地区。谷筋の居住地以外は森林で構成されかつては林業が行われていた。平地は少なく川沿いに細長く集落が形成されている。日本海側の気候で冬の寒さは厳しく、山に挟まれているので日照時間が短い。人口269人、世帯数93世帯、高齢化率39%(2016.4.1)。

未来に継承したい 人をつなげる
K区のアルペンロード

チームまっつん

成果:

未来に継承したい K区の川のそばの魅力ある暮らし

チーム名: 山あり谷あり石あり

未来に継承したい K区自然が育んだひとの結

チーム: さんよも

| ステップ | 1班 キーワード | 2班 キーワード | 3班 キーワード | 共通キーワード |
|----------|---|--|--|--|
| 2 | 清流, 山, 獣害, 祭事, 交通, つながり, 地縁, 青年会, コミュニティ, 高齢化 | 畑, 山, 生き物, 人柄, イベント, 川 | 自然, 川, 山, 歴史, 生業, 祭, 暮らし, 課題 | 1班~3班: 山, 川 (清流)、祭 (イベント) |
| 4 | 防災, 山城, 川遊び, 魚, 山, 大木, 石垣, 青年会, 墓地, 神社寺, 自然, 川, 山水, 環境美か, ビジネス, 誇り, 寒い, 涼しい, つながり, 空き家, 一本道, 交通の便 | 祭り行事, コミュニケーションの場, 豊かな自然, 口あたり, 風景, 川土, 川二, 道, 車, 子どもの遊び場, 少子高齢化, 職場, お店がない, 山への入り口, 空き家 | 川, 道, 観, 住, 防災, 水利用, 坂, 空家, 山, 谷, 人, 祭, 神社, 歴史 | 1~3班: 山, 川, 道, 空き家 1, 2班: 自然 1, 3班: 防災, 神社 (寺) 2, 3班: 祭 (行事), 風景 (観) |
| 2と4の共通 | 山, 川 (清流), 交通 (の便), つながり | 川, 山, 人, 祭り行事, コミュニケーションの場, 豊かな自然, 風景 | 川, 山, 歴史, 祭 | 1~3班: 山, 川 (清流) |
| 5 魚の骨格 | 一本道, 川, 山, 寒い涼しい, 空き家, 交通の便, 石垣, 防災, 魚, 大木, 山城, 神社寺, 川遊び | 山, 人, 祭り行事, コミュニケーションの場, 豊かな自然, 風景 | 水利用, 住, 歴史, 坂, 恵, 祭, 道, 災, 神社, 観 | 1~3班: 山, 川 1, 3班: 道, 災, 神社 2, 3班: 祭, 風景 (観) |
| 5魚の頭 | ビジネス, 青年会, つながり, 自然, 環境美化, 誇り | 山と川の資源 | 防災, 人, 空家, 結 | |
| 5魚の尾・背びれ | なし | 川土, 川二 | 川, 山, 谷 | |
| タイトル | 未来に継承したいK区の人をつなげるアルペンロード | 未来に継承したいK区の川のそばの魅力ある暮らし | 未来に継承したいK区自然が育んだひとの結 | 1, 3班: 人 |

図4: 地域診断ワークショップ(RDWS)のケーススタディ